

拉致問題を知ろう・考えよう

「1970年頃から80年頃にかけて、北朝鮮による日本人拉致が多発しました。現在、17名が政府によって拉致被害者として認定されています。平成14年9月に北朝鮮は日本人拉致を認め、謝罪し、再発の防止を約束しました。そして、同年10月に5人の被害者が帰国しましたが、他の被害者については、平成16年5月の日朝首脳会談において、北朝鮮側より、直ちに真相究明のための徹底した調査を再開する旨の明言があったにもかかわらず、未だ北朝鮮から納得のいく説明はありません。拉致問題に関する北朝鮮側の主張には多くの問題点があることから、日本政府としてはこうした主張を受け入れることはできません。拉致問題は、我が国の国家主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、この問題の解決なくして日朝の国交正常化はあり得ません。日本政府は、すべての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、政府の総力を挙げて最大限の努力を尽くします。」

上記は、外務省のウェブサイト内の「北朝鮮による日本人拉致問題」の「我が国の基本的考え方」に掲載されている内容です。(https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/n_korea/abd/rachi.html)

拉致問題についてのより詳細な内容は、内閣官房拉致問題対策本部事務局が作成している次のウェブページに記載されています。(https://www.rachi.go.jp/index.html)

このワークでは、神奈川県の高校生が書いた作文、拉致被害者及び家族を主人公にした漫画、その作者のメッセージを通して、拉致問題について理解を深めることをねらいとしています。

北朝鮮当局による日本人拉致は、我が国に対する主権侵害であるとともに、拉致被害者やそのご家族にとって重大な人権侵害です。一方、北朝鮮当局以外の北朝鮮の人々や、日本で生活する朝鮮半島につながるのある人々に責任があるというわけではありません。そのことを理解し、差別や偏見をもたないように留意してください。

ワーク1

- (1) 神奈川県教育委員会発行の「心みつめて」(第8集)に収録されている高校1年生が書いた作文「関心をもつことが第一歩」を読んで、どのような感想をもちましたか。2つ以上書きましょう。
(https://www.pref.kanagawa.jp/documents/5844/kanshinwomotukoto.pdf)

- (2) 作文「関心をもつことが第一歩」の筆者は、当初、拉致問題について「他人事」と思っていたが、「まずは拉致問題について知ることから始めるのが重要だ」と書いています。拉致問題について「知る」ために、あなたは具体的にどのようなことができそうですか。書いてみましょう。そのあと班で話し合ってみましょう。

ワーク2

拉致問題対策本部の電子図書館には「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」に添えた、拉致被害者の家族の飯塚耕一郎さんが、読者にあてたメッセージが掲載されています。それを読んで、拉致被害者の家族の気持ち等について考え、書いてみましょう。

(<https://web.d-library.jp/rachitai/g0102/libcontentsinfo/?conid=359398>)

- (1) メッセージの下線部「(略)・・・長い時間が過ぎたにもかかわらず、きわめて残念ながら、いまだ母 八重子さんとの再会はできていません。・・・(略)・・・なぜ、どうしてこんな長い間解決に向けて物事が進まないのか・・・(略)」を読んで、その理由として考えられることを書いてみましょう。



(C) 著・飯塚耕一郎 画・本そういち

- (2) メッセージの「(略)・・・時間をかけてよい問題ではありません。・・・(略)・・・残された時間は少なく一刻の猶予もありません。・・・(略)」を読んで、そのように飯塚さんが考える理由を書いてみましょう。

- (3) メッセージの「(略)・・・皆さんの声はこの問題の解決の力となります。・・・(略)」を読んで、解決のために、私たちができることを具体的に書いてみましょう。

本作品を読んでいただいた皆さんへ（「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」）

本作品を読んでいただき、ありがとうございます。皆さんどのような感想をお持ちになられたでしょうか。

この本が2006年9月に発刊されてから、約15年と長い年月が経過しました。長い時間が過ぎたにもかかわらず、きわめて残念ながら、いまだ母 八重子さんととの再会はできていません。

一方、さまざまな方々のご協力により2009年3月に韓国釜山にて父飯塚繁雄と共に金賢姫氏との面会ができませんでした。面会中、北朝鮮で八重子さんと彼女との生活や八重子さんの子供を思い出す様子などいろいろなことを丁寧にお話しいただきました。私自身、記憶がない母親の気持ちに多少なりとも近づけたかとも感じました。そして、金賢姫氏も交え八重子さん、父飯塚繁雄との4人での再会を約束し、改めて一刻も早い拉致被害者救出を心に誓いました。

しかしながら、2022年となった今、2002年の5名の拉致被害者の帰国以降、誰一人として日本に帰国できておらず実質的に何も変わっていません。なぜ、どうしてこんな長い間解決に向けて物事が進まないのか、疑問、焦り、怒り、悲しみなどさまざまな思いが日々心の中を巡っています。

私は2004年2月に北朝鮮による拉致被害者家族連絡会（通称：家族会）に入り、八重子さんを含めた拉致被害者の救出のため、これまでさまざまな活動を行ってきました。私だけでなく、多くの家族会のメンバーが活動してきました。国内での講演、署名活動、歴代総理も含めた日本政府への答申／嘆願、米国政府／諸外国や国連の人権委員会への協力要請などの国際活動などです。まさに文字通り“東奔西走”で、家族を救うために日本、世界各地を駆け巡り、救出を訴え続けてきました。

しかし、このような家族会メンバーの活動や想いに応えることなく、北朝鮮は「拉致問題は解決済み」との姿勢を公式な立場として崩してはけません。北朝鮮は2002年、2004年に帰国していない被害者に関する調査結果を出してきましたが、いずれも合理性も信用性もない証拠であり、誰もが死亡と容認できないものでした。私の母の報告書には、母を示す名前が何一つ載っていませんでした。さらに2014年5月にストックホルム合意を日朝間で締結し、北朝鮮は特別調査委員会による拉致被害者の再調査を約束しました。その後、何の成果もなく2016年2月に北朝鮮は一方的に調査中止と委員会の解体を行いました。結果的に北朝鮮は20年近く、われわれ家族会メンバーとその家族である拉致被害者自身をもてあそび続けました。

さらに、この20年の間に家族を救うために活動を続けてきた家族会の中心的なメンバーであった元代表の横田滋さん、元代表であり田口八重子さんのお兄さんであり私の養父である飯塚繁雄、有本恵子さんのお母さんの有本嘉代子さんなど、再会がかなわないまま家族が一人また一人と亡くなっています。拉致問題は北朝鮮を取り巻く他の問題である核、ミサイル問題と同様に時間をかけてよい問題ではありません。これは人の命の時間には限りがあるからです。

八重子さんが拉致されて44年と長い時間が経過しました。残された時間は少なく一刻の猶予もありません。そのため、引き続き日本政府は拉致問題が日本国の最重要、最優先課題の位置付けを維持し、“全ての拉致被害者の即時一括帰国”をあきらめることなく、遅れることなく実現させなければなりません。

皆さんも、この問題を友達、家族、親戚など身近な人と話し合ってください、この問題への理解と支援を引き続きいただければと思います。皆さんの声はこの問題の解決の力となります。

最後までお読みいただきありがとうございました。

令和4年6月某日

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会 事務局長 飯塚耕一郎

※下線は、引用者が加筆

1 ねらい

生徒と教職員が、北朝鮮当局による日本人拉致問題の事実を知るとともに、拉致被害者やその家族の気持ち等を考え、人権問題を認識し、自分にできることを考える意欲や態度を育みたい。

まず、同年代である高校1年生が書いた作文から、「知る」ことの重要性と自分にできることを考えさせたい。

次に、拉致被害者家族のメッセージより、拉致問題が時間をかけてよい問題ではないことや、どうすれば「問題解決の力」になるのかについても考えさせたい。

2 進め方

展開例（50分 3～4人の班を作る）

学習活動	指導上の留意点
<p>1 ワーク1（25分）</p> <p>①（1）の前に、64ページ上段にある拉致問題に関する文章を読み、日本政府の見解について理解する。</p> <p>②「関心をもつことが第一歩」を読み、感想を記入する。</p> <p>③「知る」ためにできることを考え、シートに記入する。その後、班で話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・この学習を通して、行き過ぎた差別意識や偏見につながらないように、生徒には黙読させ、教員が読み上げるのもよい。 ・作文に共感する意見が多いと予想されるが、自分以外の生徒の感想も共有し、異なる意見も尊重することを確認する。 ・自分一人でできることの他に、誰かと一緒にできることも考えさせたい。
<p>2 ワーク2（25分）</p> <p>①メッセージ中の「どうしてこんな長い間」解決に時間を要しているかを考え、記入する。</p> <p>②メッセージ中の「一刻の猶予」もない理由について考え、記入する。</p> <p>③「この問題の解決の力」となるために、できることを考え、記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・理由は1つではないことを伝え、できるだけ多くの意見を記入するように促す。 ・ICT機器を活用させ、時間があれば、電子図書館の他の資料も勧める。 ・これまでに長い年月が経っていることも踏まえた上で、「もし自分の家族が・・・」と仮定させ、できるだけ自分事に近づけて考えさせる。 ・ワーク1(2)で考えたことをもとに、より具体的に考えさせるのもよい。 ・私たちにとって「現在進行形」の課題であることを考えさせたい。 ・ここでも、自分の意見と同じように、他の人の意見も尊重する姿勢で取り組ませたい。

3 解説

拉致問題をテーマとした授業を計画する際には、次の2つの点について押さえておきたい。1つ目に拉致問題の「事実を認識する」ための時間と、拉致問題について「(自分で)考える」ための時間の両方を設定することである。限られた時間の中ではあるが、教員はこのことを意識しておいた方がよい。2つ目は、「他人事ではなく、いかに自分事に近づけられるか」という点である。いかに当事者に近づけて考えさせられるかが重要である。

これまで「拉致問題」をテーマとしたワークシートでは、視聴覚教材として映画「めぐみ」、アニメ「めぐみ」、家族の手紙を朗読する動画等を活用する授業を取り上げてきている。それに加え、横田めぐみさんの母親である早紀江さんの我が子を想う短歌(「心みつめて」第7集)も取り上げている。

今回は、高校1年生が書いた作文と拉致被害者家族のメッセージより、自分にできることなどを考えさせたり、拉致問題が時間をかけてよい問題ではないなどについて感受させたりしたい。事前に、拉致問題対策本部の「電子図書館」(次頁参照)を利用し、漫画「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」を生徒に読ませる課題を出し、印象に残っている場面などについて、感想を書かせる等の学習活動があると、拉致問題についてより深い理解につなげられる。

ワーク1について

授業を受ける立場である同じ高校生が書いた作文「関心をもつことが第一歩」(「心みつめて」第8集)を通して、この問題について関心をもたせ、考えさせたい。

この作文の筆者は、アニメ「めぐみ」を視聴し、拉致被害者や家族がどのような思いでいるのかを考え、漫画「母が拉致された時僕はまだ1歳だった」を読み、家族の複雑な想いに寄り添い、感じたことを記述している。アニメ「めぐみ」等を視聴した経験のある生徒であれば、共感をもって受け止めることができる。その上で、改めて拉致問題を「知る」ために、自分にできることを具体的に考えさせ、共有させたい。このことを通して、「拉致問題」とのかかわりを深めるきっかけとしたい。

ワーク2について

「本作品を読んでいたいただいた皆さんへ(飯塚耕一郎さんからのメッセージ)」は、「電子図書館」のウェブページに掲載されている文章である。

本作品とは、漫画「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」である。拉致被害者の家族たちは、これまで、そして今も、どのような思いでいるのかを感じ取らせたい。幼い子どもを残して拉致された母親の気持ちはどれほどか。子どもは母親の記憶がほとんどなく、写真の中の姿や親戚の話からしか母を知ることができない状況で、成長する過程でも母親不在という現実を痛感し続けることになった。

生徒たちには、この問題は、私たちにとって「現在進行形」の課題であることを考えさせたい。私たちができることとして、この問題に関心をもち続けることが拉致被害者を取り戻すための一歩であること、また、家族が抱えている苦しみを理解し、支援することが私たち、そして社会に求められていることを考えさせたい。

<引用文献等>

- ・作文「関心をもつことが第一歩」 神奈川県教育委員会発行「心みつめて」(第8集)収録
<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/5844/kanshinwomotukoto.pdf>
- ・拉致問題対策本部 電子図書館「本作品を読んでいたいただいた皆さんへ(飯塚耕一郎さんからのメッセージ)」

<参考資料>

- ・「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」(双葉社) 著者:飯塚耕一郎/画:本そういち



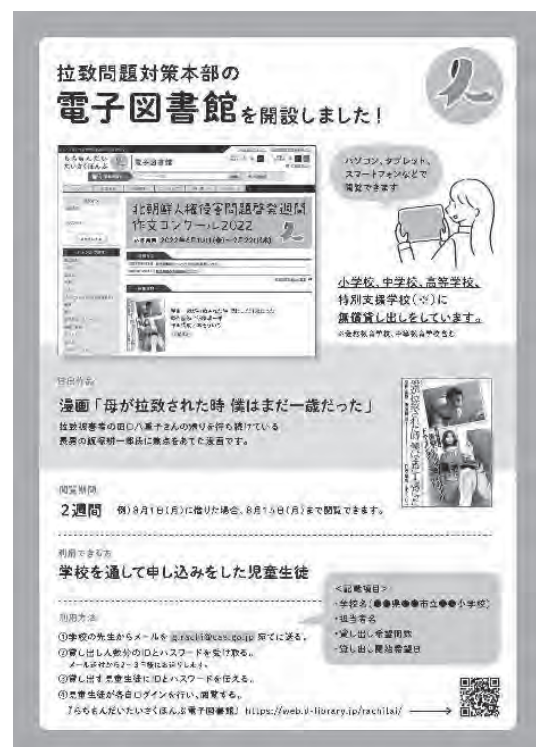
拉致問題対策本部の「電子図書館」

※ この書籍等はICT機器等で読むことができ、小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校に、無償貸し出しされている。

(<https://web.d-library.jp/rachitai/g0101/top/>)



「心みつめて」(第8集)



拉致問題対策本部の「電子図書館」